

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 5 日現在

機関番号：32612

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520565

研究課題名(和文) 日本語諸方言動詞・形容詞の活用・アクセント活用の系譜関係解明のための基礎的研究

研究課題名(英文) A preliminary study for Elucidating Genealogy of Conjugation and Accentual Conjugation in Japanese Dialects

研究代表者

屋名池 誠 (YANAIKE, MAKOTO)

慶應義塾大学・文学部・教授

研究者番号：00182361

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円、(間接経費) 840,000円

研究成果の概要(和文)：日本語諸方言の活用・「アクセント活用」の系譜関係を再建するために不可欠な重要地点の精密・詳細なデータを臨地調査によって収集・分析した。

その結果、活用においては、現在進行しつつある活用の変化において語幹末音、語幹長さ、語幹のアクセント素性などが変異条件(活用に関する変異の範囲を指定する条件)となって変化が進んでゆくことが確認された。

アクセント活用においては、日本語諸方言すべてに共通する通有性として、子音始まりの語尾が続く場合：主要なアクセント位置は2種、母音始まりの語尾が続く場合：主要なアクセント位置は1種のみということがほぼ確実に明らかになった。

研究成果の概要(英文)：To reconstruct the genealogy of conjugation and accentual conjugation in Japanese dialects, I conducted a study by collecting data in the areas which have dialects with unique conjugation or accentual conjugation. Detailed analysis shows that there are several significant types of conjugation and accentual conjugation that have not been known before.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語学

キーワード：方言 活用 アクセント活用 二段活用 音便形 ラ行五段化

1. 研究開始当初の背景

日本語諸方言の動詞・形容詞活用の研究は江戸時代以来さかんにおこなわれてきたが、諸方言や各時代語の多様なあり方を統一かつ精密に記述できる方法は従来提案されてきていなかった。

諸方言の活用の研究も、伝統文法の活用整理法を各研究者が個人的な工夫で改良するかたちで記述が行われてきたので、同一基準でのデータの比較・対照もむずかしく、諸方言の活用の系譜の再建に至ってはまったく手が付けられていなかった。

日本語の動詞・形容詞は活用する際、アクセントも語形変化するが、これを「アクセント活用」と呼ぶことにすると、「アクセント活用」も動詞・形容詞の語形変化の一側面として、その重要性は活用に劣るものではないにもかかわらず、「アクセント活用」研究は活用研究に比べて低調どころか、研究そのものがほとんど行われていない状況であった。

方言アクセントの研究はさかんに行われていたにもかかわらず、「アクセント活用」に関しては適切な記述方法も開発されていなかったため、諸方言の記述研究はほとんど行われていなかった。

基礎的なデータすらないため、諸方言の比較研究などまったく望むべくもない状況であり、アクセントの系譜研究は、重要な「アクセント活用」の情報を欠いたまま、アクセント語類の統合状況やアクセント体系間の差異だけを根拠として、進められてきたのであった。

研究代表者は、活用と「アクセント活用」の、日本語の歴史的・方言的、すべての変種に適用可能な汎用性のある記述方法の開発をめざして、研究を進めてきたが、そうして得られた方法(日本語教育学会編『新版 日本語教育事典』(大修館書店 2005 年)所載の屋名池誠「活用の捉え方」「活用とアクセント」参照)は、その有効性を、特異な活用・「アクセント活用」を有する複数の方言の臨地調査で検証することができた(平成 20 年度～22 年度科研費基盤研究(C)「日本語動詞・形容詞の活用・アクセント活用の記述方法の研究」参照)ので、その方法を用いることで、諸方言の動詞・形容詞形態について、精密・詳細なデータを収集することが可能になった。統一的方法によって同一基準で捉えられた等質のデータであるため、その先、比較・対照研究に歩を進めることも可能になった。

2. 研究の目的

日本語諸方言の動詞・形容詞の活用・「アクセント活用」を統一された記述方法で記述してゆくことが可能になったので、この方法をもちいて諸方言を同じ基準で比較・対照し、方言間の差異が生じる機構とプロセスを明らかにすることを通して、日本語諸方言の活用・「アクセント活用」の系譜関係を再建す

ることをめざし、そのための基礎作業として、系譜論的研究のためには不可欠な重要地点の精密・詳細なデータを収集・分析することを今回の研究の目的とした。

系譜再建のための基礎的作業として、得られたデータを分析し、活用・「アクセント活用」に関して諸方言に共通する、いわば「日本語の特質」というべきものと、各方言ごとの特異性・偶有性とを識別することも順次進めてゆく。

3. 研究の方法

活用・「アクセント活用」に関して特異な性格を有する重要な方言であるにもかかわらず、いまだ系譜論的研究に不可欠な精密・詳細なデータが収集されていない地点をえらんで臨地調査をおこなった。

諸方言の通有性と偶有性を精密にとらえるべく、活用・「アクセント活用」によって活用形の語形を生成する際に必要な諸条件を精密に抽出することをめざし、考えうる限りさまざまな形態的なファクターを組み込んだ動詞・形容詞リストを用意して調査をおこない、得られた各方言のデータは順次比較・対照しつつ整理・分析した。

4. 研究成果

本研究の研究期間中に、以下の6地点の方言について臨地調査をおこなった。

新潟県佐渡市姫津
静岡県浜松市三ヶ日町
岡山県笠岡市真鍋島
香川県多度津町高見島
高知県土佐山田町
長崎県壱岐市勝本町

得られた知見は以下のとおりである。

(1) 活用に関して

活用システムの系譜を考える際には、活用システムに関してどのような歴史的变化がありうるのか、どのように変化が進むのかを知っておかなければならない。そのためには、現在進行中の変化を詳細に観察することが必要である。

動詞活用に関して変化が進行中の諸方言を調査した結果、語幹末音、語幹長さ、語幹のアクセント素性などが変異条件(活用に関する変異の範囲を指定する条件)となって変化が進んでゆくことが確認された。

「二段活用の一段化」の場合

九州の諸方言は二段活用を残存しているが、「二段活用の一段化」が進行してゆく際には、語幹の長さ、語幹末音のちがいが条件となって

- i) 語幹が一拍で、～i で終わるものがまず最初に「一段化」し、
- ii) 語幹が多拍で、～i で終わるものか、語幹が一拍で、～e で終わるものがそれに続き、

iii) 語幹が多拍で、~e で終わるものが最後に「一段化」するという順序をたどるのが普通である。

これは 語幹が一拍で、~i で終わるものありかたに、他の母音終わり語幹動詞をそろえて、母音終わり語幹動詞の同一性を維持する方向で変化がおきたものといえる。

これに対し、沓岐(勝本町)方言は、語幹が一拍で、~i で終わるもの の語幹末が i からすべて e に変わってしまっており、これは他の母音終わり語幹動詞の方に、語幹が一拍で、~i で終わるもの の動詞を同化させているといえ、他の諸方言とは違う方向に進んだ方言であるといえる。

「ラ行五段化」の場合

「ラ行五段化」が進行途中の方言でも、語幹末音や動詞語幹の長さが「ラ行五段化」が起きる/起きないの条件となっている(今回の調査地でいえば沓岐勝本)。

「サ行イ音便」の場合

多くの方言では滅びてしまった「サ行イ音便」を現在も残存させている方言があるが、それでもサ行の動詞ならすべてイ音便が起きるといえる方言はまれで、多くの方言ではサ行の動詞でもイ音便になるものとならないものにわかれている。

その際、イ音便出現・不出現の条件になっているのは動詞語幹の長さやアクセント素性である(土佐山田・福井県三国町など)。

特に興味深いのは、三国町の方言の予備調査結果で、アクセント活用では(他方言のような語幹のアクセント素性による区別はなくなっているため)アクセント素性は無用になっているにもかかわらず、アクセントとは直接関係ないサ行イ音便という分節音形の指定において、アクセント素性がイ音便形の出現/不出現の条件として機能しているのである。

(2) アクセント活用に関して

アクセント活用に関して特異な性格を有する諸方言を精密に調査することで、方言ごとの特異性・偶有性のほかに、日本語動詞・形容詞のアクセント活用において諸方言すべてに共通する通有性を見出すことがほぼ可能になりつつある。

瀬戸内海備讃諸島の真鍋島・高見島など、特異なアクセント体系で知られる方言や、土佐山田のように中央方言の古態を残しているアクセント体系の方言について、今回はじめて精密で詳細なアクセント活用の記述を行うことができた。

それら特異なアクセント体系の方言でも、動詞のアクセント活用では、

子音始まりの語尾が続く場合：

主要なアクセント位置は2種

母音始まりの語尾が続く場合：

主要なアクセント位置は1種のみという点が共通しており、本研究以前から調査してきた他のアクセント体系の方言もみな同様であることから、これは方言の違いを超えた日本語の動詞アクセント活用の通有性である可能性が高まった。

動詞・形容詞の活用形のアクセント位置は活用形ごとに決まっており、その位置は、語末から数えて何拍目というように計数されるのが普通なのだが、今回、語頭から計数される方言が新たに見つかった(静岡県三ヶ日町)。

これにより、アクセント活用における「語末からのアクセント位置の計数」はほとんどの方言に見られる顕著な特性ではあるものの、日本語諸方言のアクセントにとって必ずしも必須の特性ではないことが明らかになった。

アクセント活用において、語尾の前の語形の長さによってアクセントを大きく変えてしまう方言が多くみつかった(今回調査した方言では佐渡姫津・真鍋島・高見島・土佐山田)。

一般にアクセント活用の決定条件は

- ・語幹のアクセント素性
- ・語尾に登録された潜在的なアクセント位置

の二つで、これら二つが与えられれば活用形のアクセントを生成できるのであるが、これらの方言では、これに

- ・語形の長さ

という第3のファクターが加わっており、この情報がないとアクセントは生成できないのである。興味深いのは、同じ動詞であってもできあがった活用形の長さが異なれば、アクセントも大きく変わることである。

このうち、特に佐渡姫津の方言は、アクセント素性が必要な条件ではなくなり、長さと語尾の種類だけでアクセント活用が決まる仕組みとなっていることがわかった。

京都方言で中世末期に起きた大アクセント変化では、語頭が低く始まる語にあってはその長さによってその後の音調形が(短い語は低起式に、長い語は高起式にと)大きくかわったが、これらの方言も同様の歴史的变化を経過している可能性が高いことになる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

屋名池誠「中世末期日本語の語と語表記」(『芸文研究』106号(印刷中)) 査読なし 2014年

〔学会発表〕(計0件)

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等 なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

屋名池 誠 (YANAIKE, Makoto)

慶應義塾大学・文学部・教授

研究者番号：00182361

(2) 研究分担者 なし

(3) 連携研究者 なし